

〔図説〕 松本歯学 29 : 95~96, 2003

key words : 3DX[®] — periapical radiolucency — diagnostic image

歯科用小型 X 線 CT (3DX[®]) 画像診断： 根尖病変を明瞭に観察できた 1 例

永山 哲聖, 内田 啓一, 新井 嘉則, 塩島 勝, 安河内知美*

松本歯科大学 歯科放射線学講座
松本歯科大学病院 総合診療科*

Diagnostic imaging by limited cone beam CT (3DX[®]):
A case of periapical radiolucency

TESSEI NAGAYAMA, KEIICHI UCHIDA, YOSHINORI ARAI,
MASARU SHIOJIMA and TOMOMI YASUKOUCHI*

Department of Oral Radiology, Matsumoto Dental University School of Dentistry
*Department of Interdisciplinary Dentistry, Matsumoto Dental University Hospital

従来、根尖病変の画像検査は、口内法 X 線写真、パノラマ X 線写真により、行っている。今回、歯科用小型 X 線 CT (モリタ製作所、京都、以下 3DX[®]とする) により、根尖病変の精査に有用であった 1 例を経験したので、その画像を供覧し報告する。

患者は 38 歳、女性。口蓋部の腫脹を主訴として 2002 年 8 月本学を受診した。初診時に撮影された口内法 X 線写真では、上顎右側中切歯根尖部から上顎右側側切歯の根尖部にかけて類円形で境界明瞭な X 線透過像を認める。しかし、頬舌的な範囲が判然としなかった (写真 1)。このため、根尖病変と周囲組織との位置関係と形態、範囲の精査のために 3DX[®]検査を行った。3DX[®]画像では、水平断面と歯列並行断面にて上顎右側中切歯根尖部から上顎右側側切歯の根尖部にかけて類円形の境界明瞭な X 線透過像を認める。歯列横断面では、X 線透過像による唇側皮質骨の菲薄化を認め、口蓋側では、皮質骨の消失を認める (写真 2)。

根尖病変の範囲の検査には、口内法 X 線写真撮影が多用されてきたが、頬舌的な範囲の詳細は把握できなかった。そこで、3DX[®]を使用することによって 3 次元的に観察することが可能である



写真 1 : 口内法 X 線写真

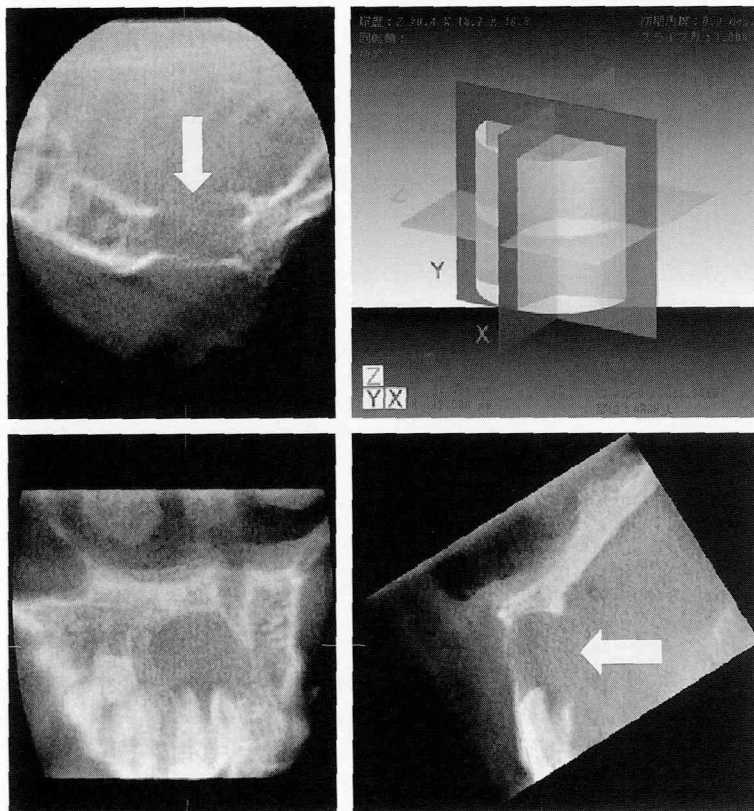


写真2：3DX[®]画像（3DX MULTI IMAGE MICRO CT モリタ製作所）唇側皮質骨の菲薄化と口蓋側皮質骨の消失（矢印）

ことから、3DX[®]は根尖病巣を対象として頬舌的範囲ならびに周囲組織の詳細をも観察することが

でき、非常に有効な画像検査法のひとつであると考えられた。